



文五郎禮讚

井上吉次郎

梅玉丈をなぜ藝術院會員にしない、博士は北海道にいても博士でせう、と菊五郎がいつた。オトワヤらしい論理で面白く、そして梅玉はまさに至藝の域に達している。關西俳優だから會員にしないわけがなく、もし鷹治郎、

歌右衛門時代に役者を會員にするのであつたら、關

西のために鷹を省くことはなかつたらう。古靱は關西の藝界から堂々會員に選ばれた。藝術院會員になることもなか今日名譽の表象でも藝能の指標でも何でもないから、問題にはならないものであるが、そんなもののある限り、古典藝術とその藝術家には相當の關心事たらざるを得ないから、會員の選び方に世間が關心を持つ。この官僚の標準は立役をとつたんだと思ふ。どんなに藝が細かでも女形では會員になれまい。端役では更に望がない。死んだ松助や箱登羅が藝術院會員になることは、よし百まで生きてても

考えられない。その間に時代が變つて藝術院が消えてなくなる。ことなら考えられる。

ところで、文五郎だが、これも藝術院は考えられない。津太夫なき後、古靱は斷然諸太夫を引き離してしまつた。近衛公そつくりの顔をしている大隅も、あの調子では、とても足許にも寄れず、また後釜にも坐はれない。

一頃反旗をひるがえした、よい男の若い太夫も志はあつても、力はまだまだ。榮三が死んで文五郎の地位もまさにこれだ。紋十郎の男振りで人形恥かしく使つた時期から、や枯淡の味が出て來ても、まだまだはこも同じ感情だら

う。文五郎の演技は至妙に達してゐる。馬術で、鞍上人なく鞍下に馬なし、なんていふが、全く文五郎と人形

は一つになつてしまふ。人形に血が通ふなんて表現は古い。さて、この文五郎が會員になれない。大阪市の文樂表賞ぐら

いなら、古靱と共に一座を代表して、市長の前に立てる。藝術院となると、人形使いななか眼中にない。そんなら古靱は淨瑠璃語りとして入選したのか。日本音曲數々ある中で、特に淨曲を選んだのはどうしたことか。清元延壽太夫のような天成の大音楽家を度外視してよいか。安來お糸とか雲月とかをまさか會員にせよとはいふまいが、延壽や、それから長唄にはまだ元老が健在である、ここいらは請求

隨筆

權を持つたらう。やはり文樂を一つの人形淨瑠璃劇として、その藝術の代表的地位に古靱太夫を認めただと思ふ。そこで、この藝術構成の主要々素は、人形廻はしにあるか、淨曲語りにあるかの問題を出せる。文樂自體は、太夫を中心に考えて來たようだ。時に一代の名手が出れば、三味線が中心に考えられることさへある。西園寺公から名を貰つた名庭絃阿彌なんか三味線引きで紋下だつた。

三味線はよいものである。殊に太棹のしつかりしたパチさばきはみものだ。あの細かい手の動きは、豊かな天分と多年の修練を思はせる。そのメロデーは快き感情をそそる。第一賑かでない。この賑かさは、樂音中に多分に含まれる騒音の所作と思ふ。ここにこの樂器の限界がある。この限界は佐吉の天才を以つてしても越せない。これを主要樂器とする限り日本音樂は純粹の音樂になり得ない。四ツ竹でタンバリンに對抗することは出來ても、三味線でピアノに對抗出來ない。三味線は所詮のどの伴奏樂器だ。太夫に連れた三味線だ。津太夫を引きまくつた綱造なんか三味線の分際を知らない。あの禿頭の意氣凌まじく氣合はげしく、みていて氣持ちがよい。老來肉體的に流石の津太夫も押されて苦しかつたものと思ふ。三味線は助成すべきもので、引き廻はすものでない。そして、三味線で

は、どんな名手でも藝術院は見向くまい。ウキオリンならとる。ここいらは可笑しいが、しかし納得される節もある。

淨曲は全く三味線に頼る音曲であるけれども、三味線の曲でない。文樂は三味線に過當な地位を與へ、人形を下位に置き過ぎてゐる。觀客の側からすれば、藝術の焦點は人形の演技にある。床の人達は眼中にない。傍から流れて來る觀賞助成の音曲に過ぎない。三味線は最も下位にある。野崎の連れ引きみたいな場合でも三味線が主要對象でない。

隨筆

こんな構成の藝術で、文樂自體が手スリを重んじない。無論、官僚の選擇は、そんなことにかかはらず、文五郎を認めない。この評價は正當でない。能樂では

シテをとる。梅若万三郎を擇んだ。歌舞伎では菊、吉、幸四郎の立役をとつた。文樂は人形だから、その使い手を捨てて太夫をとる、といふが定法だらうかどうか。われわれは、結城孫一郎も合せて會員にすべきものとも思はぬが、文樂を一個の完成せる藝術なりといふ考へ方を持つなら、淨り語りより人形使いを演技の主體に置いたらどうかと思ふ。日本畫の色と線を綺麗に配合しただけの藝を會員資格にするくらいなら、文五郎の表現する線や調子の美は更に高次の藝術境に間違いない。(夕刊新大阪一筆)